

カレッジ・レディネスを高める入学準備としての e ラーニングプログラムの検討と設計 -英語学位課程における高校から大学へのトランジション支援-

Design of an E-learning Program to Enhance College Readiness as Entrance Preparation
-Transition Support from High School to College in English-medium Programs-

大西克樹*,** 中野裕司** 合田美子**
Yoshiki ONISHI, Hiroshi NAKANO, Yoshiko GODA

* 立命館大学 グローバル教養学部事務室

** 熊本大学大学院 社会文化科学教育部 教授システム学専攻

* College of Global Liberal Arts, Ritsumeikan University

** Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

＜あらまし＞ 大学の入学予定者に対する入学前教育では、入学までの学力維持や底上げを図るリメディアル教育が多く実施されている。高校から大学へのトランジションは大きな変化を伴う時期であり、「大学生」になるための支援となる入学準備としての教育的支援も必要ではないだろうか。本研究では、筆者が所属する英語学位課程の入学予定者を対象に、試行的に実施した入学準備のための e ラーニングプログラムを基礎として、カレッジ・レディネスを高めることに着目した e ラーニングプログラムの検討と設計を行う。

＜キーワード＞ カレッジ・レディネス, e ラーニング, トランジション

1. はじめに

令和 4 年度の学校基本調査（文部科学省）によれば、大学・短大進学率は 60.4%、大学進学率は 56.6%に達している。日本の高等教育が、マーチン・トロウのいうユニバーサル段階に入って久しく、1991 年の大学設置基準の大綱化後、学生の多様化と大学の教育改革が進み、入学前教育や初年次教育、キャリア教育などが多く実施されている。こうした背景の中で、大学生の「生徒化」の議論がある。

「生徒化」している学生について、杉谷 (2018) は、「自律性が乏しく、学業に対して受動的な姿勢を示し、教員による指導を求める傾向にあるとともに、実用性のある教育内容を志向する受益者感覚が強い存在」とした上で、「入学前からを視野に含め、「大学」らしい大学教育像を構築し、その重要性を伝えること、そして、大学生を「学生」として扱い、「学生」らしい振る舞いを求めること」を提案している。また、入学前教育の力点をシフトさせる観点の一つとして、及川ら (2019) は、「入学後に学ぶ学問への興味を醸成させ、入学後も意欲的に学習する準備となる内容であること」が必要であるとしている。さらに、高大接続の仕組みとして、田中 (2019) は、「大学教育の準備とは何かに改めて向き合い、接続力と

してカレッジ・レディネスを育む学習プログラムの開発が不可欠」と述べている。

では、大学生へのトランジション期にある大学入学前の生徒が、入学後に「大学生」となるための、カレッジ・レディネスを高める教育的支援は検討できないだろうか。本研究では、筆者が所属する英語学位課程（卒業に必要な単位のほぼ全ての授業を英語で修得する学位プログラム）の入学予定者を対象として、カレッジ・レディネスに着目した入学準備教育プログラムの開発を検討する。なお、対象者が世界各地から集うため、LMS を用いた e ラーニングプログラムとする。

2. カレッジ・レディネス (College Readiness) とは

Conley (2008) は、「高校から大学へのトランジションは、多くの人が経験しているように最も難しい時期である」（筆者訳出）とした上で、「カレッジ・レディネスとは、一般的な高等教育機関の学士課程に入学・編入でき、再履修なしに成功する上で生徒に求められる準備レベル」（筆者訳出）と定義している。そして、主要な認知戦略 (Key Cognitive Strategies)、アカデミック上の知識とスキル (Academic Knowledge and Skills)、学習態

度 (Academic Behaviors)、状況に対処するスキルと自覚 (Contextual Skills and Awareness) (筆者訳出) という大きく4つの側面を提示している (Conley, 2008)。前者2点は重要な側面ではあるものの、初年次教育科目等で扱う内容であることから、本研究では、後者2点の学習態度と状況に対処するスキルと自覚を取扱うことを検討する。

3. 試行的な取組みの紹介

入学準備のためのeラーニングプログラムを設計し、下記の要領で試行的に実施した。

■対象：2023年4月の入学予定者37名

■期間：2023年2月21日～3月31日

■方法：LMS (MoodleCloud) を用いたeラーニング形式

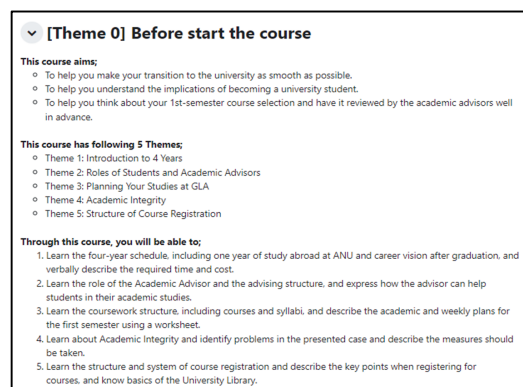


図1 学習目的・テーマ・目標
(LMSの画面を抜粋)

プログラム導入では、学習の目的・テーマ・目標を明示した(図1)。5つの学習テーマは、入学後の新入生オリエンテーションで扱う内容に沿っており、その一部を教材として提供した。これにより、入学までの期間を活用して、大学生になるための準備ができていると自己評価できる状態にすることを狙いとした。

実施後に行ったアンケート(Formsを使用, N=32)の総合評価の設問では、1.Excellent, 2.Good, 3.Satisfactory, 4.Weak, 5.Poorの5件法で回答を求め、78%が1.Excellentまたは2.Goodを選択した。また、各学習目標の到達度を自己評価する設問では、1.High(80-100%), 2.Middle(50-79%), 3.Low(21-49%), 4.Not achieved(0-20%)の4件法で回答を求め、全てで高い到達度を示した(図2)。なお、この設問ではデータの欠損が認められた6名のデータは除外した(N=26)。さらに、0(全く当てはまらない)～10(とても良く当てはまる)の11件法で回答を求め

た、「大学での学修・生活を始める自信を持っている」は平均6.34pt, 「大学生になるために必要なことを知っている」は平均7.34pt, 「将来のキャリアを早期から考えることの大切さを知っている」は平均7.88ptであった。

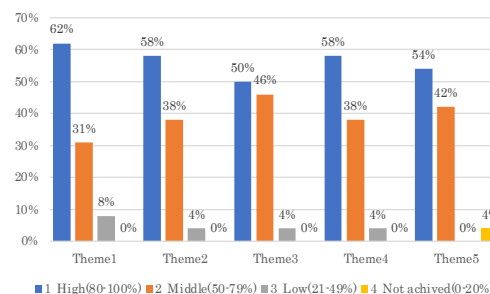


図2 テーマ別の学習目標到達度

4. 今後の研究プラン

上述のアンケート結果を踏まえれば、入学準備に焦点を当てたeラーニングプログラムの実施効果はあったといえる。特に学習目標に対する到達度の自己評価が高かったことはそれを示すものであるといえる。一方で、プログラム実施前後の比較や変化を確認する評価が実施できていないため、評価における課題は残る。また、「大学での学修・生活を始めることの自信」が高くない点からは、プログラム改善の余地がうかがえる。今後の研究では、この試行的な取組みを基礎として、インストラクショナル・デザイン理論を用いて、設計・開発する。その後、在学生等の協力者を得て、形成的評価を実施し、課題点を修正する。その上で、2024年4月の入学予定者を対象に実施することを目指す。

参考文献

- 及川愛, 石田あすみこ (2019) 入学前教育の力点はシフトしている～入学前教育を充実させる観点の整理～, 日本私立大学連盟 大学時報 384号, pp.66-73
- 杉谷祐美子 (2018) 第3回大学生の学習・生活実態調査報告書, ベネッセ教育総合研究所, pp.58-69
- 田中義郎 (2019) ハーバード大学プロジェクト「繁栄への道(Pathways to Prosperity)」と新たな高大接続モデル、カレッジ・レディネス, 桜美林大学総合研究機構 国際学術研究第2号, pp.1-7
- David T. Conley (2008) *Rethinking College Readiness*, New Directions for Higher Education, No.144, pp.3-13